

慣習と宗教のあいだ
ージャワ人ヒンドゥー教徒の通過儀礼を手がかりにー
On the difference between custom and religion:
Considering the Hindu Javanese life-cycle rituals

鏡味 治也 (金沢大学)
KAGAMI Haruya (Kanazawa University)

慣習と宗教の境が問題になるのは、インドネシアの主要宗教であるイスラーム教やキリスト教がいずれも、国外で教義が整えられてから伝播し、あるいは布教されたためだろう。教義に抵触する慣習がやめさせられたという話はキリスト教伝道の過程でよく聞かれたし、地域慣習の是非をめぐるイスラーム改革派と伝統派の論戦も各地でたたかわされている。しかしヒンドゥー教のように、国の認可を求めてバリの信仰慣習を基盤に教義が整備されたものは、その過程で廃止された慣習はいくらかあったものの、その多くが「ヒンドゥー教」の名のもとに現在まで維持されている、あるいは少なくともバリ人はそう思って慣習を維持している。通過儀礼もその一つで、妊娠から成人までが「人間の儀礼」、死後祖霊に祀るまでが「祖霊の儀礼」として 5 種儀礼の一角を占める。

発表者は 2019 年 8 月に東ジャワ州ルマジャン県スンドウロ村のヒンドゥー教寺院を訪れ、その世話をするジャワ人の寺院祭司に近在のジャワ人ヒンドゥー教徒の活動について聞き取りをした。その結果、妊娠から死後の弔いに至る通過儀礼の内容がバリ人のそれとはまったく異なることがわかって驚いた。つまりその儀礼の中味は、宗教教義による規定ではなく、それぞれの慣習に則っていることになる。本発表ではまず、政府公認のヒンドゥー教評議会策定の教義を見たうえで、その慣習の土台が民族文化的な伝統であることを、バリ人の慣行だけでなく、ヘフナーのテンゲル人に関する民族誌、またギアツやクンチョロニングラットの記述するジャワ人イスラーム教徒の事例とも比較して確認する。

通過儀礼は人間の生に道筋をつけるものであり、どんな人になりたいか、どんな人として死にたいかを規定する。それがひとつの民族で共有されているのなら、それは民族意識を支える基盤のひとつになるのではないか、民族の在り方は通過儀礼の中に(も)埋め込まれているのではないか、という点を論じたい。